

第9回 長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関するモニタリング部会 議事要旨

1. 日 時 : 令和7年6月24日(火) 10:00~11:30
2. 場 所 : AP名古屋 (8階 B+C+Dルーム会議室)
3. 出席者 : 松尾部会長、石田委員、辻本委員、藤田委員、木村委員
4. 審議内容 : フラッシュ操作に関するこれまでの調査結果報告と今後の計画

【議事要旨】

規約の改正及び令和6年度の長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関する調査結果と今後の調査計画について審議を行った。

規約を改正するとともに、モニタリング調査結果について、アンダーフラッシュ操作による底層DOの予防保全効果があることを確認できたことから、引き続き令和7年度の更なる弾力的運用として試行運用及び調査を継続することを了承した。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は、下記のとおり。

1) モニタリング調査結果

- ・長良川河口堰のフラッシュ操作による溶存酸素の予防保全効果のモニタリングについては、溶存酸素量の絶対値に加えて飽和度にも着目し、評価すること。
- ・底生動物調査において、出現傾向が顕著な生物は種レベルで抽出して個体数や湿潤重量を整理すること。
- ・各種データの経年変化については長良川河口堰の完成前の状況がどの程度把握できるか確認すること。
- ・藻類の出現網組成の経年変化をより詳細に分析ができるように整理すること。
- ・アンダーフラッシュ操作後にナガラちゃん付近で底層の溶存酸素が短時間で低下する現象については、フラッシュ操作の前後に実施した河川横断方向の観測結果から局所的な現象であることを確認した。今後そのメカニズムについて考察する必要がある。

2) 令和7年度の更なる弾力的な運用について

- ・底質の強熱減量が経年的に減少している要因について分析を継続すること。
- ・物理環境の変化と生物の変化を関連付けて総合的に分析をしていく際には、フラッシュ操作の影響と自然の影響といった様々な要因が重なっていると考えられることから、それらの要因を抽出できる手法を検討すること。
- ・粒度分布の経年変化は上流域における河川工事の影響を受けている可能性もあることを考慮しながら、底生生物のモニタリングを実施すること。
- ・アンダーフラッシュ操作による効果と、出水による影響が、それぞれ長良川河口堰の環境をどう変化させるのか分析し、また、水塊の移動など、断続的に実施されているアンダーフラッシュの累積的な効果という観点からの整理を検討すること。

以 上